

令和元年度第3回滋賀県総合教育会議 会議録

1 日時

令和元年9月13日（金）15:15～17:15

2 場所

滋賀県庁北新館3階中会議室

3 出席者

三日月知事、由布副知事、福永教育長、土井委員、藤田委員、岡崎委員、野村委員
滋賀県民俗文化財保護ネットワーク会長 寺嶋 裕文氏
Biwako Backroads ディレクター 松井 ライディ 貴子氏

【事務局】 樫原教育次長、山田教育総務課長、岸田教職員課長、松野健康福利室長
西川高校教育課長、村井高校再編室長、辻本幼小中教育課長
加藤生徒指導・いじめ対策支援室長、左谷特別支援教育課主幹
上橋人権教育課長、合田生涯学習課長、國松保健体育課長
澤本文化財保護課長、小林文化芸術振興課長、青山美の滋賀企画室長
原田観光振興局副局長

4 議事録

福永教育長

失礼いたします。本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。それでは定刻となりましたので、ただいまから、令和元年度第3回滋賀県総合教育会議を開会いたします。

本日は、次第にごございますように、「文化財の保存活用と継承について」というテーマで意見交換を行いたいと考えております。皆さん御存知のように、本県は全国屈指の文化財保有県でございますので、このテーマで総合教育会議を開催させていただいたところでございます。よろしく願いいたします。

また、本日はゲストスピーカーといたしまして、滋賀県民俗文化財保護ネットワーク会長であり、山之上薙刀祭保存会会長の寺嶋裕文様にお越しをいただいております。寺嶋様におかれましては、これまで竜王町山之上の「ケンケト祭り」に携わってこられた御経験を踏まえ、地域の祭りを保存継承する現場での課題等について、またいろんな御苦勞についてお話をいただければと思っております。

また、もう一方、Biwako Backroads ディレクターの松井 ライディ 貴子様

にもお越しいただいております。松井様におかれましては、これまで県内で文化財を生かして、外国人旅行者と地域をつなぐガイドツアー等の企画などに携わっておられます御経験からお話をいただければ思っております。どうぞよろしく願いいたします。

なお、お二人とも、後ほど事務局より説明をさせていただきます滋賀県文化財保存活用大綱の検討懇話会の委員もしていただいております。実は本日、検討懇話会が午前中にございまして、本日お二人には、申し訳ございませんが一日、お付き合いをいただくということで、誠にありがとうございます。

それでは、会議に入ります前に、少し紹介をさせていただきます。本日、掲示しております会議名の横断幕、こちらにつきましては、県立堅田高等学校の書道部の生徒の皆さんに制作をしていただきました。生徒の皆さんには、夏休みの課題として取り組んでいただき、3年生5名、そして2年生と1年生それぞれ1名ずつの計7名が分担して筆をとったということでございます。

冒頭長くなりましたが、私からは以上でございます。

それでは、開会に当たりまして、知事から御挨拶をお願いいたします。

三日月知事

皆さんこんにちは。お忙しい中、御臨席いただきましてありがとうございます。日頃から滋賀県の教育文化行政に、それぞれの立場で御尽力、御貢献いただいておりますこと、心から感謝申し上げます。

また寺嶋さん、松井さん、ありがとうございます。今日は一日お付き合いをいただいているということでございまして、誠にありがとうございます。

冒頭、堅田高校の書道部の皆さんに横断幕を制作いただいたと報告がありましたが、拝見して改めて高校生も中学生も、伸び伸びと書いたり生きたりするようなことを称揚していきたいなと感じました。

今日は2点申し上げます。

1点目は、ここに来る前に交通安全推進大会に参加しておりまして、昨年はおかげさまで、交通事故で亡くなる方が、近年まれに見る少なさだったので、今年は御案内のとおり、直近で昨年よりも22人多いという状況です。とりわけ5月には、保育園児が横断歩道で亡くなってしまう痛ましい事故もございましたので、改めて交通安全推進の取組を呼びかけたところでございます。皆様方もお仕事柄、運転する機会や交通量の多いところを行き交う機会もあろうかと思っておりますので、どうぞ気をつけていただければと思います。

2点目は、お手元にはがきをお配りしておりますが、今月末から、NHKの連続テレビ小説「スカーレット」で、信楽焼の女性陶芸家が主人公となります。ぜひこの機会に、日本六古窯の一つである信楽焼を、近江の茶や近江の地酒などの地場産業とともにPRできるようにしていきたいと思っております。

す。さらに、来年からは大河ドラマ「麒麟がくる」において、明智光秀公が主人公となります。滋賀県内には坂本城をはじめ世界遺産を目指す彦根城、復元プロジェクトを進めております安土城跡など、様々なお城、城跡がございますので、文化財の一つとして、今後大切に保存するとともに、活用していきたいと考えているところでございます。

本日話題になる文化財に関しては、私は 2 点あると思っております、一つは私たち自身の学習・体験です。私たち自身が学ぶこと、実際にこの文化財を体験すること。知事になってすぐに、ケンケト祭りにも行かせていただいて、大変感動したのを覚えておりますし、ぜひ私たち自身が知ること学ぶことを大切にしたい。もう一つは、そういったことを大切に学び、伝え、保存する人材ではないかと思っております。

私たちの学習・体験と人材の 2 点から、本日御議論いただく文化財の大綱等につきましても、より深めていきたいと考えておりますので、どうぞ皆様方の積極的な御参画をお願い申し上げまして、冒頭の私の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

福永教育長

知事ありがとうございました。それでは、議事に入らせていただきます。

本日の会議の流れでございますが、初めに事務局から、滋賀県における文化財の保存継承について、お時間を頂き、説明をさせていただきます。

その後、寺嶋様の方から、地元で取り組んでおられますケンケト祭りにつきまして、また、松井様の方から、外国人旅行者向けガイドツアーなどについてお話を頂き、そのあと皆さんと意見交換をさせていただきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

それではまず、事務局から説明をお願いいたします。

文化財保護課長

それでは事務局から文化財の保存と活用の現状と、現在策定を進めております滋賀県文化財保存活用大綱の素案につきまして御報告をさせていただきます。

まず文化財の保存活用と継承の現状についてでございますが、スクリーンを御覧いただきたいと思います。地域に点在する多種多様な文化財ということでございますが、滋賀県は、国宝が全国 5 位、重要文化財が 4 位、重要文化的景観が 2 位となっているほか、約 1,300 の城郭が県内各地に点在しております。また代表的なものを写真でお示しをしております。左の上にあります国宝向源寺十一面観音から、時計回りで、国宝延暦寺根本中堂、それから近江八幡の伝統的建造物保存地区、それから日吉大社山王祭船渡御、それから名勝玄宮楽々園、それから重要文化的景観近江八幡の水郷、それから天

然記念物ホンシャクナゲの群生ということになっております。

次に、県内の国宝・重要文化財の分布の状況でございます。県下の全ての市町に、国指定の文化財がございまして、県下全域に点在しているという滋賀県の特徴が見て取れると思います。

次に、文化財の保存・修理の状況でございます。修理前と修理後の事例を二つお示ししております。上の写真は、県指定有形文化財檜尾神社の本殿でございます。修理する前は、支柱に支えられてやっと立っていたような状態でしたが、解体・修理を施しまして、屋根の葺き替えですとか、塗装を行っております。それから下の写真でございますが、名勝胡宮神社の庭園の中にある社務所を修理したときのものです。玄関から屋根を突き破って生えていた木の撤去ですとか、屋根の葺き替え等を行っております。

次にここからは、県が実施をしております文化財の活用の事例を御覧いただきます。まず建造物の修理工事の現場、重要文化財長命寺三重塔の公開の様子でございます。見学ステージを設置しまして、工事を実際にされているところを見ていただきまして、文化財保護課の技術者が解説をいたしております。次に、美術工芸・民俗の活用でございますけれども、文化財入門者向けの仏像コスプレ体験ですとか、中高生を対象とした事業で、仏像の構造を学んでいただいている様子をお示ししております。次に、史跡・埋蔵文化財の活用でございますが、戦国講座、史跡探訪、左の下にございます写真は、埋蔵文化財センターが、小中学校で出土品の実物を見せながら行う体験授業の様子でございます。それからその右側が、発掘体験の様子、1番右端が、「びわこ My 文祭」というイベントでございまして、小さなお子さんを中心に、出土品に触れていただいたり、絵を描いてもらったりしていただいております。

次は、県内の日本遺産・世界遺産の御紹介です。県内の日本遺産は、「琵琶湖とその水辺景観」等4件、世界遺産は、「古都京都の文化財」の延暦寺がございまして。また、世界遺産につきましては、平成4年に、彦根城がユネスコの暫定一覧に記載をされてございまして、正式な登録に向けた取組が現在進められております。

こちらは、今年度から開始をしております幻の安土城復元プロジェクトでございます。安土城につきましては、織田信長が天下統一を進める拠点として築いた城で、全国的にも高い知名度を誇りますが、短期間で焼け落ちたこともありまして、その実像は謎に包まれております。写真では、現在と干拓前の安土城跡の全景をお示ししております。信長の目にした安土城は、琵琶湖に浮かんでいるように見える大変に優美なものであったというふうに思われます。安土城の調査・整備につきましては、戦前から行われておりますが、最新のものは、平成元年から20年度までの期間で実施されたもので、真ん中

の写真にあるような金箔が貼った豪華な瓦も出土しております。

次は、調査・整備の現地の状況でございます。大手道跡の調査と整備後の形、天守台の焼け跡、天守が建っていた場所の様子をお示ししております。このプロジェクトは、謎に包まれた安土城の実像を明らかにし、見える化を図ることで、県内外へ滋賀県の魅力を発信しようというもので、特に県内に向けては、滋賀県や琵琶湖への地元に対する愛着、誇りが育つようなものにしていきたいと考えております。

次は、教育委員会以外の所属での取組について御紹介をさせていただきます。文化スポーツ部では、「ここ滋賀歴史セミナー」の開催、「ぶん活かかわら版」の発行、観光振興局では、観光キャンペーンとして実施される「戦国ワンダーランド滋賀・びわ湖」、文化財を巡るコースを設定した「ビワイチ・プラス」の取組が行われております。

次は、文化財の活用についての県政モニターアンケートの結果でございます。円グラフでは、「文化財に興味がある」、「どちらかといえば興味がある」とお答えいただいた方の割合と、過去1年間に文化財に接したことがあるとお答えいただいた方の割合をお示ししております。いずれも8割強というようなことになっております。棒グラフにつきましては、文化財に接する機会についての結果でございますが、1番上の、「近くに立ち寄ったついで」というのが、理由としては多くなっております。このことは、多くの文化財が県内全域に点在していることから、何かの用事で外出したときに、その行く先の近くに神社とか仏閣があって、ついでに立ち寄ることができるということではないかと考えております。

次に、文化財保護法改正に伴いまして、今年度策定をすることとしております。滋「賀県文化財保存活用大綱（素案）」につきまして、簡単に触れさせていただきます。スクリーンかお手元の資料を御覧いただきたいと思います。大綱を策定するに当たりましての問題意識、大綱が目指すべき方向、考え方の大枠をお示ししております。左の方から、文化財に対する意識の低下、地域の過疎化等により、これまで文化財を守ってきた地域の力が低下して、文化財の継承が危機的な状況にあるという現状・課題に対しまして、実際に住んでいる人々による「これまでの地域」を中心に置きまして、これにその地域の出身者や観光客等を加えた「これからの地域」において、より多くの人々に文化財が守られる形、適切に保存されている文化財から、見る、学ぶ、体験するといった活用によって、より多くの人々が恩恵を受けることで、保存のための資金や人材が入ってくるという循環をつくっていかねばと考えております。そして文化財を支える、裾野を広げる、文化財を通して滋賀県のブランド力を向上させる、文化財に関わる人々のネットワークを構築する、地

域への誇りや郷土への愛着を育てる、とする方向で、保存と活用が循環した結果、地域が元気になって、文化財を次世代へ継承していくことができるものと考えております。大綱の概要という資料をお配りしておりますが、時間も限られておりますので、説明は割愛させていただきます。

事務局からの説明は以上でございます。

福永教育長

以上で、教育委員会事務局文化財保護課からの説明とさせていただきます。それでは続きまして、寺嶋様から、地元で取り組んでおられますケンケト祭りの継承と取組につきましてお話を頂きたいと思っております。よろしく願いいたします。

寺嶋氏

寺嶋でございます。よろしくお祈いします。

知事におかれましては、就任直後にお越しいただいて、そのときは実際に見ていただいただけですけれども、今日は課題や対応、それから私がいろいろと考えるところも御報告させていただける絶好のチャンスを頂きまして感謝しております。また、教育委員会ということで、今日のお話の中で、少し教育現場へのお願い事項になるかもしれませんけれども、そのような内容も入っておりますので、ぜひお聞きいただきたいと思っております。

その前に、知事はもう御覧になっているので、余り必要ないかと思っておりますが、御存知ない方のために、今年のお祭りで、びわこ放送さんがお越しになりまして、5分間ですが、放送していただきましたので、それをちょっと御紹介したいと思います。

(映像・スライド資料)

御紹介したとおりですが、先ほどの放送にもありましたように、少子化は当然の問題ではございますが、他にも課題を認識しております。まず、少子化の影響ということで、具体的にどうなっているのかということですのでけれども、このお祭りは、薙刀をふるう子どもが小学校4年生、数えて11歳、それから鷺の下の子どもたちが、数えて21歳と年齢層が決まっております、数えて11歳が「新振り」と言いまして、初めて薙刀を振る年齢ですけれども、実はここに該当者がいない。昭和20年のときの話ですが、これがずっと続いておまして、変化がないので当時の資料を使っておりますけれども、最初の年の子がいない。それから、先ほど鐘を打っていて、鷺の下にいた子どもですけれども、この2年間人がいないという状況が時々発生します。毎年ではないのですけれども、昔はこういう状態は無かったそうです。少子化の影響

が出ていて、役をどう割り付けていくのかというところが課題でございます。これは避けられない現実として受け止めております。

次に、役付け層の空洞化ということで、先ほどの少子化とは少し違うのですが、遠方の大学へ行っているということで、お祭りは5月3日ですが、その前の10日間練習を行います。そのときに、東京の大学へ行っていると、練習に参加できない。21歳の子はいるけれども、地元にはいないという状況ですね。そういう遠方への就学の問題がある。それから、各企業さんに就職している年代も該当してくる。高卒で、2、3年目ってところですけども、例えば、5直3交代だとか、深夜勤務になってくると練習に参加していただけないという状況になっております。

それから、先ほど450年の歴史の話をしたのですが、住民の祭りに対する熱意や意識が無くなってきています。一つは興味や娯楽そのものが多様化しているということと、毎年同じことやっているじゃないかという話です。

それから、次に保護者の負担が増えてきます。これは後ほど何回か出てくるのですが、空洞化もそうです。当日には帰るけれども、練習は行かないよ。練習っていうのは伝承だけではなくて、先ほどの驚とか、いろんな小道具、補助材料を作るわけですね。そういう準備作業があるのですが、全部親がやっている。昔は子どもたちだけでやっていたものですが、親の負担が増えるということで、親が勘弁してくれという状況になります。この役付け年代層の空洞化っていうのは、原因は幾つかあるのですが、地元にはいないがために親が負担することになります。

それからもう一つは、問題としては、現在、マニュアル類っていうのが一切ありません。なぜかという、当然天候に左右されますので、あるいは時間もずれ込んだりします。そうするとここは割愛しようとか、雨が降ったらこうしようとか、要するに自然と渡り合っているわけなので、マニュアルなんて作れないわけですね。最近はこの企業でもマニュアルを見れば全部分かるとなっているが、祭りはそういうものではないという難しさがございます。それから、祭りが年1回ということで、なかなか頭の中に入っていないという問題がございます。

それから保存会の位置付けですけども、私が27年目になるのですが、ずっとやっている長い人はいいのですが、先ほど四つの地区があったのですが、その地区によっては、その役が2年で終わってしまう。2年で覚えられないわけがないですね。そういう保存会そのものの技術伝承の能力というか、そういうものが、ほぼ今半減しています。私と、あと数人くらいが長年やってくれているだけで、あとの人は2、3年したら替わっていく。これでは伝承なんかできるわけがないという話でございます。あと、単にお祭り騒ぎが好

きだから保存会に入ってくるっていう子もいて、そういう人は別に保存・継承とかじゃなくて、単なるばか騒ぎが好きという子もいます。この辺も保存会としては、なかなかやりにくい部分です。

こういう問題があるのですけれども、問題とを感じるか、問題と感ぜないかっていうところだと思います。ここは先ほど、文化財保護課長の話にもございましたけれども、私もいろいろ考えるところでございます、大きく四つに、課題をなぜ解決しないといけないのかというところで、振り返ってみたいと思います。

一つは、やはり文化が衰退すると地域が衰退する。だから、祭りは守らないといけない。それから、地域が栄えれば、当然そこにいる人は、経済的にも潤うだろうし、そこに経済の循環が発生するのだから、地域にいることによって、働く場所と、働ける喜び、こういうものが生まれてくるのだろうなと。それから、三つ目、働ける喜びというのは、人との交わり、豊かな文化と思いやりっていうのですかね、人と交わる中で心を育ててくれるのではなかろうかと。それは当事者だけではなくて、私も孫がいますけれども、そういう考え方をつないでいくための原動力になるのではないかと思います。地域の繁栄を文化が支えるとするならば、やはり文化はですね、人を育てる教材として、保存・伝承していかないと、そういう役目を担っているのではなかろうかと、このように考えております。

その上で、どういうことをやっていくのかということ、一つ御紹介します。限られた時間なので余り詳しくお話できないのですが、先ほど年によって人がいないということがございましたけれども、この表は年度ごとに子ども的人数を時系列でまとめたものです。何年後に、ここは空洞化ができるとか、ここは人がたくさんいるよねっていうことが分かります。この表を使って、前年度から降りてきてもらうとか、役付けを調整する作業を行います。今までは、蓋を開けてみて、今年はいないよねっていう話ですけど、少子化といえども、この表さえあれば、計画的に出役者の繰り下げとか、いわゆる短中長期の対策として掲げております。それから、慣習の変更で、打つ手を先に考えるということをやっています。それから、先ほどビデオにあったんですけど、普通は立ったまま踊るのですけれども、ちょっとしゃがんで踊る踊りですね、これは70年前までやっていた芸態です。去年、文化財保護課の支援を受けまして、復元しました。それを、一昨年から実行しています。これには二つの目的があります。出役者、出る人に興味を持ってもらう。それから、見る人も、何か変わったことやっていると関心を持ってもらう。それから、祭礼そのもの、いわゆる技術・伝承そのものを復活させるということでもあります。それから事前の打ち合わせということで、役付けをする前に、

関係者の皆さん集まっていただきます。それから、衣装の一斉着付けという
 ことを行っています。先ほど見てもらった衣装というのは、複雑な衣装付け
 をしますので、1年ぼっきりで、奥さん方も地域外から来られる方にはわかり
 ません。薙刀を使いますから、血ふきの半紙をつけるわけですが、刀と一緒に
 で、半紙をどっちに付けるかと言ったらこっちですよ。でも知らない人は、
 反対に付けるわけです。そういうことも教えていかなきゃいけない。教える
 だけでは収まらず、保存会が一斉着付けをやるということをやっております。
 場合によっては、これが保護者の負担の軽減と、それから衣装を揃えとか、
 そういう効果がございます。それから練習不足が問題になっておりまして、
 一つは1週間しかないということがございます。それから、一時は、大学に
 通っているのではということ、なかなか練習に行けない、大学を休むと単位
 がもらえないので困るということで、大学に1回お願いしたことがあるので
 すが、単位はあげられないと言われた状況です。それからもう一つはスポ少
 ですね。練習を休むとレギュラーになれないとか、試合に出してもらえない
 と。それが足かせになって練習に来てもらえない。この二つは、そういう文
 化財の保護活動に関与しているのだから、少し配慮してもらえないかなと、
 こんなことを考えております。

あと、新たな課題として、衣装の手配がなかなか難しくなっています。
 かすり、昔は女性がもんぺで履いていたものですが、これが今は民芸品になっ
 ておりまして、確か80万円ぐらいしてしまう。だいたい30センチ角で3千
 円ぐらいの布切れになるそうです。これも、昔は各個人で作っていたのです
 けれども、保存会でまとめて買って貸与するというやり方をしています。そ
 れから、友禅模様の生地、先ほど薙刀を振っていた男の子が着ていた赤っぱ
 い衣装ですが、京都から仕入れていたんですけれども、生産中止になって入
 手ができなくなってしまいました。それからアミというスカート状のもので
 すね、これも今作れる人が3人で、しかも高齢化しています。それから太鼓
 があるのですけれども、太鼓のバチも、各家で長男が生まれたら、田んぼの
 畦道に桐の木を植えていましたが、農地改革などの影響で植えるところがな
 いので、今神社の空き地を利用して保存会が植えているというような状況で
 す。それから草履と藁草履、藁の減少と質の低下で問題となっています。後
 ほど、時間がありましたら、どんな取組をしているかっていうのは御紹介で
 できるかと思えます。あと、子どもたちの意識改革がちょっと必要なと思っ
 ております。準備とか練習にですね、昔私たちがやっていた頃は、先輩が後
 輩に教え、後輩は先輩のお手伝いをするような良い上下関係がございました。
 現在は、通学は、上の子が下の子を引率していますが、我々の頃は、学校に
 行く前に、30分とか1時間缶蹴りしたりとかですね、いろんな遊びをしてい

ました。そういう中で、先輩・後輩の良い関係が出てきたと思うんですけども、今の時代はもう個人個人になってしまっていて、人は人という、そういう状況になってきています。これはやはり通学も一つのそういう上下関係を作る機会じゃなかろうかなと考えています。冒頭申し上げたように、教育現場の方でもヒントになるのではないかなと考えております。当然ながらそういうこともございますので、自主性と仲間意識が低下してきております。より先輩後輩を作るための学校教育というのも、ぜひお願いしたいと思っております。

少々危険な祭りですけども、ぜひまたお越しいただきたいなというふうに思います。以上でございます。

福永教育長

寺嶋様、ありがとうございました。

それでは、引き続きまして、松井様から、「地域と共につくるインバウンドの形」についてお話を頂きます。よろしくお願いたします。

松井氏

松井と申します。今日はお招きいただきありがとうございます。

私たちが何をしているかという、私は米原市から来ていまして、米原の方がおられたら申し訳ないのですが、新幹線が停まるのに何も無い、駐車場しかないということで、長年有名というか、汚名をずっと被っております。私も、アメリカに留学していた関係で、10年以上あちらで生活したんですけど、それ以外は米原にいて、実際外に出てみて帰ってきて、すごくいいところだなと単純に思って、新幹線も停まるし、もっと外国人の人が来たらすごい楽しいだろうなと思っていて、実際、今翻訳とかの仕事させてもらっている中で、沸々と米原も見せ方によってはすごく魅力的になるし、それだけの素材も揃っているんじゃないかということで、誰かやらないかな、そういう事業やらないかなと思ったんですけど、誰も現れなくて、じゃあお前やれっていう話になって。今回こういったツアー事業という形で、米原の新幹線を下りてきていただいた外国人観光客の方向けに、ツアーを事業として始めたところなんです。その節は知事に激励の電話を頂きましてありがとうございます。

(スライド資料)

Biwako Backroads との意味は、日本語で言うと、脇道という意味なんですけど、思いとしては、東京、京都、広島といった今ゴールデンルートみたいなものがあると言われますけど、そこにちょっと脇道でそれてもらって、滋

賀県、米原だけではないんですけど、米原を玄関口として、米原、長浜、彦根、滋賀県のいろんなところに行ってほしいなという思いと、あと、ビワイチの脇道に逸れてもらってもいいかなということで。基本的には、今、自転車ツアーをメインにしたものをやっております。伝えたい価値観というのは、有名観光地と言えば京都なんですけど、今オーバーツーリズムという言葉があるように、確かに京都って素晴らしいけれども、やっぱり外国人の方の話を聞くと、人が多過ぎてと。米原はホッとするとよく言われるんです。やっぱり観光地は、それなりの外向きの顔というのがあるんですけど、滋賀県、特に米原は、そのままの日本人が住んでいる風景、昔ながらの日本の風景があるよということと丁寧伝えるということと、あとやはり京都とかは外国人観光客は放っておいても、別にどこでも行く。インフラにしても、英語の情報にしても、いろんなものがあるんですけど、米原みたいな滋賀県の田舎というのは、本当に情報は皆無だし、見つけて来てもらうというのもほとんど可能性として低いので、その代わりガイドという形で、地域を紹介するっていうのもあるんですけど、もう一つ大事な役目として、地域とつなぐ人、地域の人たち、そこに暮らしている人たちをつなぐ役目という意味で、ガイドがすごく大切だなと思って、ガイドツアー事業という形でやらせていただいています。

これは、去年ちょっとクラウドファンディングをさせていただいて、何でもこれをしたかという、もちろん自転車を買いたかったというのもあるんですけど、それプラス今言ったように、地域の理解がないと成立しないという思いがあったので、広く知ってもらいたいなという思いがあってこういう機会を頂きました。

これはですね、実際 5 月ぐらいに初めてのお客さんが来られて、夏の間はガイドが私と数名ほどしかいないんで、発展途上ではあったんですけど、10 月には、二組 6 名ぐらいのお客さんが来られますので、そこでお連れするのが、米原駅を下りて、中山道の番場宿から醒ヶ井宿まで自転車で行くという。そして醒ヶ井宿で、ここにちょっと載っていませんけど、樋口山さんという料亭があって、そこは湧き水で沸かしたお茶を出し、炊いたお米を出してという、地産地消にこだわっておられる香取さんという方がおられて、その人にも御協力いただいて、電車で行って、清水の流れを見て、そこで取れたお米と、そこのお水で炊いたお米を食べて、そのあと上丹生の井尻さんという有名な方で、仏壇づくりで有名なところなんですけど、こちらに御案内するといったルートを今作成しています。

ここで重要なのが、この上丹生の人たちが、本当にすごくオープンで、フレンドリーな方たちが多くて、積極的に協力していただいているというの

あるし、あと御自分たちでも、木彫体験というのを開発されていて、いろんな外国の方、日本人の方もそうですが、1時間半ぐらいですね、彫刻を彫ってもらってというような体験も、今、独自で開発されているということなので、そこと一緒に連携してやらせていただいているってところです。

この写真は、実際、どんなルートがいいかなということで、これは機関車の避難壕が米原駅の近くにあるんですけど、岩脇山というところがあって、戦時中に機関車を隠そうと思ったけどその前に戦争が終わってしまったというところなんですけど、私も長く暮らしていて本当に知らなくて、今回初めて知ったという。でも外国人の人たちも、こんな洞窟があって何だろうと思うんですけど、その背景の話を聞くと、なるほどと思うっていうのと、やはり米原駅という、鉄道の町という話につなげていくと、本当に納得して、興味深いとよく言っていただけるというのがあります。

これはさっき言った上丹生の木彫体験というので、お客さんというよりは、私の友達夫婦がアメリカから来たときに実際に連れて行ったもので、地元の歴史を聞きながら、彫刻体験をしているというものです。90何歳の、もう引退されている方なんですけど、昔の彫刻師の方の家というか、工房に訪問させていただいて、実際に見せていただいているという。本当にお願いするのも申し訳ないくらいで、家の中の欄間とかから、いろいろと持ってきていただいたりして、皆さんフレンドリーに接していただいているという。

これは醒ヶ井宿のヤマキ醤油屋さんがあるんですけど、その前で何か紹介しているという様子です。

これが、今回5月に初めて来られたお客さんということで、カナダからカップルで来られて。これ岩脇山のお寺があるんですけど、善光寺とちょっと縁があると言われてはいるんですけど、こんな感じで、ここは米原駅ですね、ここが出発点なので。米原を周って楽しいのかと皆さん思われると思うんですけど、実際私も最初はこんなすごいところがあるんだと思ったぐらいなので、逆に子どもとか、地域の小学生であったり、そういった子どもに知ってもらおうというきっかけでこういうツアーを開催したりできたらいいなというのはちょっと今思っています。

あとこれは、アメリカの旅行エージェントの方とちょっとお付き合いがあって、実際来ていただいたんですけど、これは樋口山さんの地産地消のお料理です。アメリカから来られているんですけど、やっぱりすごいいいと言っていて。清水もきれいだし、何もないわけじゃないけど、京都では見られない風景が見られるというのと、あと自転車がいいと言われたのは、京都とか大阪は、皆さん歩き倒しているんで、わざわざ田舎に来てまで歩きたくないという観光客の人がほとんどだから、自転車がいいよというのはすご

く言われていたのもあって、今のところ自転車を利用したツアーを進めていきたいなというふうに思っています。

これは、Biwako Backroads とは少しずれるんですけど、私はずっとアメリカのミシガン州にいまして、知事は御存知かと思うんですけど、ミシガン州から交流使節団が 30 名来られていました。それで、今回私がコーディネートして、例えば長浜だったら、竹生島に行って、その後に木之本に行つてという形で、いろいろ案を出させていただいて。これは長浜でそば打ちをやってるんですけど、実はこの日 8 月 15 日に台風が直撃しまして、結局 30 人参加ができなくて、最初に行った 5 人だけが参加してもらったんですけど、すごく喜んでやっていて。これは富田人形と言って、長浜にあるんですけども、わざわざ浜湖月さんというホテルに来ていただいて、会席料理を食べながら見ていただくものです。これは木之本のダイコウ醤油さんという醤油屋さんとか、七本槍の富田酒造さんとか、醸造タウンみたいな感じで紹介して、まち歩きをしていただいたというものです。醤油のテイスティングというのをすごく喜んでおられて、やっぱり日本酒とかは結構あるんですけど、醤油というのはなかなかない。さらに醤油の方が意外と外国人にとってはなじみがあるので、日本料理を食べに行ったら絶対醤油が置いてあるし、日本酒はみんなが飲むものでもないから、醤油でもこんなに種類があるんだよということで、すごく喜んでおられたということでした。これは、近江の茶を、ミシガンと滋賀県でやられているという中で、茶業会議所を訪問しまして、ほうじ茶作りを体験します。傍から見たら茶をかき回しているだけなんですけど、皆さん楽しいと言っておられて、すごい笑顔が物語っていますけど。やっぱり私が思ったのは、今回関わってくれた人がたくさんいて、本当に歓迎していただいたというのと、あとやっぱりそういった人たちに関わる体験があったから、皆さんに滋賀県にまた来たいと言っていただいたというのが大きかったなと思います。その例で言うと、これは石山寺なんですけど、龍華さんが 3 月ぐらいにメトロポリタン美術館に行かれて、源氏物語のエキシビションがあったのでその時にお招きされたということなんですけれども、私もちょっと個人的に存じ上げていたので、ミシガンの方が来られるのでちょっとお話いいですかということでお受けいただいて、普段は石山寺の入れない本堂の奥のところに、皆さん入らせてもらって、ニューヨークの話とか、あと仏像の話とかしてもらったんですけど、みんなお寺に行ったというのももちろん、石山寺自体がすごいというのもあるんですけど、直接しゃべらせてもらったっていうのが本当に感激したみたいで、何かもうバスの時間がないと言っているのに、外で大写真撮影大会が一人ずつ始まってというのがこの写真なんですけど、何か本当に皆さん忘れられない体験だったというふうに

言っていたのは、やっぱりそれだけ人が関わっていただくということと、私たちのツアーもコンセプトとして、丁寧に伝えていきたいというのがあります。

ありがとうございました。

福永教育長

ありがとうございました。

様々な話を聞いていただきましたので、少し広くなりすぎているかもしれませんが、これから皆様方との意見交換に入らせていただきます。

今、事務局から説明、そして寺嶋様、松井様から、いろいろお話を伺いました。この後、皆さんが感じられたこととか、ここはどうなのかなとか、御意見や御質問とかですね、あるいはここをもう少し詳しく教えてほしいということがございましたら、順次御発言をいただければと思いますのでよろしくをお願いします。

まず、教育委員の皆様方から、御意見や御感想、御質問などございましたらよろしくをお願いします。自由に御発言いただければと思いますので、よろしくをお願いいたします。

藤田委員

寺嶋様、松井様、今日は大変ありがとうございました。今日のテーマが文化財の保存・活用、あるいは継承についてということで、今、二人の先生方にいろいろ聞かせていただきました。

一つは保存をしていくということで、寺嶋さんには大変御苦勞を身に染みて、これは多分、滋賀県だけでなく全国どこでもこういう課題で苦勞されているのだらうなと思います。それは、やはり冒頭に知事がおっしゃったように、学ぶ、あるいは体験する、それを人材としてどのように文化財を育てていくかということとのつながりで見えていくと、文化財に対する依存度っていうのが、時代とともに相当変わってきているという気がします。だから、そもそも祭りっていうのは、例えば豊年であったり、豊漁であったりという、そういう依存をしていくことに、自然の力に対して人間として謙虚な思いが祭りというものを通じてお祈りをした、あるいは祭りに依存している本来の中身が、時代とともに変わっていく。だから、それを支えている人たちが、おそらく時代とともに変化している、それが少子化で支えなければならないとか、あるいはそういう依存していく内容や意識が変わっていくので、それに対して啓蒙が非常に難しいとか、あるいは技術というその祭りの伝承ですね。長浜の曳山祭りがあるのですけれども、これも全く同じですね。そういうこととかあるいは保存したりする経費というか、コスト、これの負担が難しい。だからそういう時代の変化の中に依存している姿が変わるとすると、

新しい時代にどういうふう依存している中身を変えていっているかという
と、今寺嶋さんのおっしゃっているような角度でいくと、一つは観光に文化
を依存させながら、観光という中で一つの文化を依存させていくということ
があると思うのですね。例えば、私ごとですけれど、文化で、三つの国に行っ
たのですが、一つはギリシャ、一つはトルコ、一つはドバイ。ギリシャとい
うのは何もない国でして、もう産業ではほとんどオリーブオイルくらいしか
ないです。でもね、オリンピアの神々だけがずっとギリシャにあるのです。
それだけの文化力で保っている国の気がしました。だからそういう意味では、
本当に先人の強い文化力に依存しながら、特に目立った産業もないし、オリ
ーブと柑橘類が少しあるぐらいのような感じの国でしたと思います。それでも
オリンピアの神々に今でも依存して、何とか外貨を稼いでいる。トルコは、
オスマントルコの宮廷を中心にして、あそこは、アジアとヨーロッパの狭間
みたいなところですので、そういうところで、どういうふうにして国の依存
をしたらいいかということに対して、EUに入りたいけれど、EUから見たらア
ジアの国と見られたりして難しい。ドバイは、文化も何もなくて、今新しい
文化を作って、これが未来に何とかなるということで、そういう依存をしよ
うという。裏側が全く、国々によって違うということをも今思い出しまし
て。そうすると日本の地域の文化に依存していく姿の有り様というものを、
どういうふうに作っていけばいいかなということを考えておりました。

それで、やっぱり一つは、若者とか、文化を依存していく最低の伝統を守っ
ていくということを何とかしていかなきゃならないという気がします。それ
と新しい文化を維持していくとなると、それを文化の形を見るということも
一つですけれども、その形を作り出してきている人間の模様といいますか、
人間の心の在り様という、それが日本の文化をずっと作っていると思うので
す。だから、根底にはそういう日本の文化を作っている日本人の心の中身が
形として出ているわけで、それを寺嶋さんの苦勞が、例えば、松井さんの努
力によって花咲いてきたらいいなというような気がします。ただ松井さんの
ような、仕掛けをして推進する人がいないとできないと思います。誰かが仕
掛けてそれを推進していこうと。たまたま地の利という米原の新幹線、滋賀
県の玄関口、それと色々な体験を、観光というツーリズムに変えて、いろ
んな形で、その裏側を見せるだけじゃなくて、その裏側をずっとやっている
日本人の文化というのはおもてなしとかいろいろあって、それはどういう背
景から生まれているかっていうことは、世界に貢献できるものがあると思
いますね。世界に貢献していく日本の文化力をどう出していけるかというこ
とで、非常に重要な感じを受けました。とは言っても、お金もいろいろかかる
ことですから、今日は知事もお見えだから、何とか文化を支えてほしいと思

いますけど。そういう意味では、日本が貢献できる文化力というものの依存度を作り上げるには大変重要なことだという印象を受けました。

三日月知事 ケンケト祭りって、外国人は来られますか。

寺嶋氏 記憶にないですね。

三日月知事 見たらおもしろいと思います。今藤田さんがおっしゃったように、寺嶋さんの努力が松井さんの存在で花開くっていう。薙刀を回している所を見れば、あれは何だと強く関心を持たれるのでは。

松井氏 そう思います。ほとんどの外国人は祭りの意味を多分分かっていなくて、神事っていうことも多分理解してないレベルなので、そういうことも含め、何でこういうことをして、今日午前のお話でもいろいろありましたけども、水がない地域だからっていうふうにおっしゃっていて、何かそういう全て文化的につながっているっていうところをちゃんとうまく説明したら本当に滋賀県の祭りって、滋賀県の祭りだけではないのですけれど、本当にいろんなストーリーがあるのだなっていうふうに思います。

寺嶋氏 良いヒントを頂きまして本当にありがとうございます。今日の午前中の会議でも、どちらかっていうと、文化財を観光に利用しようっていう、そういう発言が多いのですよね。利用しようって言われると、こちらとしては余りおもしろくないですね。協調しようと言われたら話は変わって、共に支え合うっていうか。そういうことであれば、保存と伝承のために、旅行を使うという考え方ですね。人を呼び込むために、祭りを使うのではないと。保存するために客を呼ぶのだというそういう言い方になるのでしょうか。

三日月知事 同じことを違う方向から言っているようなところもあるのかもしれません。

寺嶋氏 どちらかという、見てもらうために来てもらうというお話でしたね。

三日月知事 見てもらうために来てもらうし、見てもらうために見せるというものもあるのかもしれません。教育的なことばかり言っていると、おそらく残らないのでは。だからそれをどう乗り越えていくのかというところが課題かなと思って、さっきのお悩みを聞いておりました。

福永教育長 ありがとうございます。それではそのほかに、岡崎委員どうぞ。

岡崎委員 お二方の話を聞いていて、寺嶋さんのお話を聞いたときに、自分が悩んできたこととほとんど一緒のことが違う分野でも起きていると感じました。私もPTA活動でいろいろとやってきたときに、学校のために何とかしようとか、子どもたちのためにという思いが、徐々に役の担い手が当番制で回って行くようになって、保護者の意識が低下していきました。そのときに取り組んだのは、とりあえず時代に合った対応に変えることです。役員の皆さんに「大変ですがこの1年頑張りましょう」という声掛けをしながら、PTA会員さんと一緒にやってきました。でもその1年だけでいいのだったらとか、次の年は役をしないでいいのであれば頑張ると言っていただけの保護者も実はおられるので、そういった対策も時代の変化の中で工夫というか、やり方の一つなのかなと思います。あとは、皆さんが同じことをできなくてもいいので、自分ができるときに、できることで、できるようにやってくださいという働き掛けをずっとしてきたのが、少しずつ浸透し学校の様子が変わっていったことも体験したことがあるので、そういうことが祭りの運営に生かせるのかどうか分かりませんが、参考になればと思いました。同じような悩みが共通であるのはなぜだろうかと考えたのですが、やはり一人ひとりの思いというか、心の部分なのかなと思います。学校のためとか、我が子のためとか、御近所のためとか、何かを思って取り組める人が育つように心を育てることが、やはり教育の担う役目かなと思いました。

先ほどの説明の中にもありましたが、保護者の方が、何とか2年やりましょうみたいな感じで言っていると思うのですが、そういった方々が楽しんで取り組めて、2年やって良かったと思えると、子どもたちとか、次は連れ合いにさせてみようとかと、何かそんな風土が築き上げられたら、伝統の継承とかも続いていくのではないかと少し思いました。ぜひ何か良い方法を見出していきたいなと思います。

また、松井さんのお話を聞いていて、質問なのですが、私もビワイチのことで、ツーリストの方とお話をしたことがあります。滋賀県は琵琶湖があるのだから、ビワイチをもっと徹底的に作り込んで、サイクリングロードとかを整備すればいくらかでも外国人を呼ぶことができると。呼べるだけの素材があるということを教えていただいたのですが、来られた外国人の方は、そのあたりの感想というのは何かありますか。

松井氏 ビワイチをされた方から直接話を聞いてはないのですが、米原にもサイクルステーションというものがあって、よく一緒に協力していただいたり、

教えていただいたりしているので、話を聞くと、ここ 3 年間で何百人と増えて、外国人からの利用がすごく多いとおっしゃっていたのが一つと、個人的には、ビワイチももちろんそうなのですが、する人とならない人と、結構分かれてしまうと思うので。やっぱりハードルが高いと思うのですよ。だから、琵琶湖全体で考えると自転車だけじゃなくて、車であるとか、別に自転車じゃなくてもいいのかなと思っていて。なぜかという、滋賀県ってやっぱり琵琶湖があるから、連続した文化っていうのが語れるというか、琵琶湖を中心にした文化、全て琵琶湖につながっているみたいな感じで、ストーリーを作るのが簡単というか、すごく上手にできると思っています。それを周ることによっていろんな地域を尋ねられるのだよっていうふうに、琵琶湖を中心にしてブランディングというか、そういった伝え方をすれば、おっしゃるように、いっぱい人が来るんじゃないかなというふうに思います。

岡崎委員 似たようなことを思ったのですが、先日の教育委員会で、旧うみのこの廃船の話があったのを聞いて、あれだけのお金がかかるのは少しもったいないと思っていました。今言われたようなことで、先ほど滋賀県の文化財の位置とかを見ても、大津から近江八幡まで自転車を積んだうみのこがずっと行けて、そこで観光客を降ろしたり、高島まで行ってみたいとか、何かそういう水上交通も更に発展させれば、こういった文化財を生かした観光を行うことと、プラス高島の方の産業を充実させ活性化させるとか、何かそういう人の動きを助けるのに琵琶湖とうみのこを活用できれば良いとお話を聞きながら思いました。また、最近は琵琶湖を走っていると、歩道の雑草がすごく気になるようになりました。ビワイチで周る人が見たらどう思うのだろうなど。これを地域の力で常にきれいにできれば、観光に来た人たちが気持ちよく自転車で周れたりしたらいいなと思います。やはり人の心を育てないといけないのかなと思います。

福永教育長 ありがとうございます。それではそのほかに、野村委員どうぞ。

野村委員 ありがとうございます。私も地域の方で祭りっていうのは、毎年あるのですけれども、今おっしゃっていたように、本当に年代の差が激しくて、ちょうど中間ぐらいの間の方々がやっぱりなかなか参加が難しいところではたくさんあります。でも今、映像を見させていただいた中で、すごく演じている子どもたちが、生き生きと取り組んでいて、そして自分の子どもとか孫たちとかを見に来るおじいちゃんおばあちゃんの姿っていうのがありまして、その中でやっぱりこの地域で、自分の子どもなり孫なりを見ながら成長

を感じている。そしてまた、お祭りで演じている子どもたち一人ひとりが主役になって、達成感を持って、そしてまた一つひとつのコマひとコマが、全部つながっていきながら、最後に本当に終わったときに、みんなが達成感っていうのですかね、この祭りをやり遂げたっていうのをすごく感じられると思うのですね。私の地元の方も、地域でお祭りがあった後、みんなで御飯を食べるのですが、その中で本当に60代、70代の方から、元服っていうのがありまして、中学校の2年生ぐらいの子から一緒に食事をというか、中学生ぐらいの子はもうお給仕に回ったりするような形にはなるのですけれども、そんな中でやっぱり昔の話を聞きながら、子どもたちは自分の地域を知っていきますし、それをやりながら本当にお酒を飲んでおられる大人の方を見ながら、子どもたちも勉強をするというようなことが、本当にずっとつながっているのですね。ですから、やっぱりこのお祭りっていうのは、絶対にやめないっていうか、続けていかなければならないっていうことはすごく感じています。それもやっぱり学校教育の中でというか、ここには、この地域には、この地元には、このような文化があるんだ、そんなことを学校の中でも、祭りというものを一つ捉えながら、それを継承していくことが、大人になったときに、小学生の子どもがお父さんになったとき、お母さんになったとき、そのときにまた自分の子どもたちにも伝えられるような、そんな循環っていうのですかね。そういうのをしながら、そのときに、一つの祭りをみんなでやり遂げたなっていうか、そういう達成感のようなものを感じられるようなことができるといいのかなというふうに思いましたのと、息子にね、こういうふうなお祭りあるみたいよってゆうべ言ったのですが、インターネットからずっと見ていたのですね。そのときには、「すごいなあ。みんな生き生きしながらやっってはるなあ。」っていうのも言っていたのと、「こういうふうなお祭りがあるっていうのをどんどんメディアに出して行って、すごいいいことだな。」っていうふうに言っていて、今はインターネットっていうか、時代の流れで、どんどん動画でも流れていきますし、そうしたところを何か活用するといいいのかなというふうに思いました。

それと松井さんのお話をお聞きしながら、すごく女性目線の計画というか事業を展開されているなというふうに思っていて、何か自分たちもやってみたいなっていうか、そんなことを思うような、地域のつながりとかそういったところを考えながら展開されているっていうのを、ちょっと何かうらやましいっていうか、そんなふうにつけていける、自分たちが思う構想で、来てくださった方にこういうふうなことが提供できると。またその提供したことに対して、やっぱり来てくださった方たちがどういうふう感じておられて、そして感じてくださったことが喜びに変わるっていうか、そういうような

とを見せていただいて、何かいいなって、うらやましいなっていうふうに感じました。

やっぱりこう、人と人が関わるお祭りにしてもそうですし、ツアーというか、そういったところも、やっぱり人と人が交わりながら、関わり合いながらやっていくことには変わりがなく、そうしたところがとても大切なところになってくるので、今後も絶対続けていただきたいなっていうに感じさせていただきました。ありがとうございました。

福永教育長 ありがとうございます。土井委員いかがですか。

土井委員 松井さんに質問ですが、外国人の方はどのようにアプローチして来られるのでしょうか。インターネットを通じてかもしれませんが、米原の方には申しわけないのですけれども、外国人の方が「米原」で検索することはほとんどないと思うのです。どういう形でアプローチされて来られるのか、あるいはどのように発信されておられるのか、お聞かせいただければと思います。

松井氏 おっしゃるように「米原」でということはないですし、あえて言いますと「滋賀」で検索するというのはほとんどないと思います。なので、本当に本意ではあるんですけども、米原って御存知のように、新幹線で、20分で京都から来れる、プラス大体外国人の方は、JRパスっていう新幹線が乗り放題のものを持っておられるので、ワンデイトリップというので京都から来てくださいというのを、今、そういうふうな切り口で行っている。でもそれは、徐々にもし私たちが流れを作り上げるのであれば、米原というのものもあるし、もちろん滋賀県には琵琶湖がある。琵琶湖自体があるというのもの、多分台湾の方とかは、ビワイチが人気なのでよく御存知だと思うんですけど、欧米の方はほとんど知らない。なので、サイズの的にも、世界で百二十何番くらい大きさでという話をいつもするんですよ。ミシガンの人だったら、ヒューロン湖の1%しか実は大きさがなくてという話を、この間30人の中でして。でも、世界で3番目に古い、すごい生態系があつてという話をすると、皆さんおーっという話になるというのがあるんで、ちょっと話が逸れたんですけど。最初から米原とかはやっぱり出せない、京都から少し足を延ばせば行けるっていうのから始められたらいいなというのが一つと、今来られている方には、ほとんど実はあまりプロモーションしてなくて。というの、人材の問題もあるので、やっぱり見切り発車で仕事をお受けして、ガイドの質、クオリティーが高くない部分からやってしまうといけないというのものもあるので。徐々には進めているんですけど、今来られているのは、さっ

き言った旅行会社、エージェントを通じて、何件か来ていただいている。あと日本にもありますけども、アメリカの掲示板っていうのがあって、アメリカだけじゃないですけど世界で使われている掲示板があって。その掲示板には、日本にはコンピューター関係とか様々なトピックのコミュニティーみたいなのがあって、掲示板の中の日本旅行っていう掲示板の中で、主人が掲示板をけっこう使っていたので、そこでこんなのやっていますと言ったら、そこでおもしろいとなって。要するに、そこに来る人って、最初からターゲットに興味がある人なので、広く知らせるというより、その情報を欲しいという人に届けるということで、逆に狙って情報発信して、今回は来ていただけた人がいたという感じです。

土井委員 ありがとうございます。観光を推進していく上で、どういう形で情報提供、発信していくのかはとても大事なことです。こちら側がこの方法が良いと思っても、相手方の関心があるはずで、向こうはそれに乗ってくれるかどうか分かりません。相手側の関心に合わせたキーワードを使って発信していくことをお考えになっておられるのだと思いますので、大変勉強になりました。

次に寺嶋さんに対してですけれども、一つは四つの地域で祭りを支えておられるというお話ですが、その地域で大体人口規模がどれぐらいあるのでしょうか。もう一つは、資料を拝見したところでは分からなかったんですけども、この祭りを担っておられる、いろんな役をしている子どもたちは基本的に男の子なんですか。女の子も参加しておられるのでしょうか。

寺嶋氏 男の子ですね。

土井委員 すると、子どもが足りないというのは、男の子だけを対象としてのことですね。

寺嶋氏 昔は長男だけだったのですが、今は次男、三男にも広げています。

土井委員 私の住んでいるところの祭りも担い手は男だけなんです。そのあたり、これまでの伝統をどう守るのかという問題と、地域をまとめていく上で、これからの祭りの在り方をどうしていくのかという問題を考える必要があるのではないのでしょうか。それから、私は京都の大学に勤めているんですけども、京都の祭りは、基本的に大学生が支えているんですね。時代祭にしても祇園祭にしても、京都の子どもたちも参加していますけれども、全国から来ている大学生が、祭りに関わって支えています。滋賀にもいくつか大学があるん

ですけれども、大学生が地域と関わる、祭りに関わって盛り上げているという光景をあまり見ないように思うんです。地域の方も、積極的に呼びかけておられるわけではないような気がしますので、そのあたりをどうしていくのがよいのでしょうか。少しお聞かせいただければと思います。

寺嶋氏

地域は四つで、ちょっとばらつきはあるんですけど、全体で 450 軒くらいですが、大体平均すると 100 軒くらいになります。それから大学生とか、自衛隊さんとか、外国人の方をどうするかという話だと思うんですけど、近くですと日野祭りが曳山っていうことで、曳くだけなら誰でもできるんですけど、やはり奉納となってくると、先ほど最後に舞っていましたが、場所とか、長年やってないと分からないですから、少なくとも外国人の方は、無理だろうなというふうに、ちょっと決めつけるのは悪いかもかもしれませんけれども、恐らく数年掛かるでしょうね。1年目は見てもらうだけとかですね、そんな感じになっていくのかなと思います。

あと野村委員の話とも関連すると思うんですけど、守るとか守らないとかっていうのも確かにあるんですけど、祭りが終わったら、みんな満足なんですよ。喜んでいるんですよ。そうでない人もいますが、でも大半は、よかったです。満足した。それだけです。もうにこにこ顔で。先ほどの、前年度の経験者に下りてきてもらうっていうのも、だいたいみんな終わった後、準備するときは、うーんとか言っているんですけど、終わった後は、「よかった。うれしかった。息子があそこまでできると思ってなかった。」とかね、そんな話が、やっぱり親御さんから出てくるんですよ。やっぱりその満足感なんでしょうかね。これが土井委員のお答えになるのかどうかなんですけど、何年かやってもらうときも、やるときは、「来年は勘弁してよね。」って言われるのですが、頼むとやってくれると思います。

土井委員

地域をどう活性化していくか、そのために地域の祭りの在り方をどうしていくのかという問題と、伝統をどう継承していくのかという問題を、どう仕分けて、どう調和させていくかは難しいことだと思います。それから、滋賀の大学生との関係については、単発でバイトとして雇うというやり方もあるので、サークルの形で関係を築くことも考えられます。サークルですと、1年生から4年生までいますので、地域の祭りなどに関わってくれるサークルがいくつか出てくると、先輩を通じて後輩に継承されていくことになります。大学生をどう組織化するかが大事だと思うんですね。今であれば、彼らは大学の中の学園祭という祭りをしているだけなので、そういう力のように地域に取り入れていくのかは、おそらくコーディネートの仕方だと

思うんです。この点は、ガイドの場合も同じだと思います。関心のある子を単発で呼ぶやり方、サークルなどと関係を築いて、代々引き継いでもらうやり方、いろんなやり方で、大学あるいは学生たちと関係を築いていかれることが大切ではないかと思います。

寺嶋氏 まさに滋賀大学であるとか、彦根の方であれば学部がありますから、そういうところと一緒にやってやることも考えたいと思います。

三日月知事 あと県立大学とかもそうですね。大学生の巻き込みについては、ケンケト祭りであったらおもしろいなど。

寺嶋氏 我々はどうしても、単発っていう考え方が出てきます。1日2万円の日当という話ですね。

福永教育長 竜王町であれば、例えば、ダイハツ工業とかあるので、そういう企業さんがどう関わっておられるのか。

寺嶋氏 お客さんとして来られるんですが、参加者ではないですね。

福永教育長 5人でも10人でも募ってやるといいかもしれないが。

藤田委員 在所のこだわりがあるかもしれない。今日の議論では、文化っていうのをいかに活用していくか、継承していくかということで、ひも解いていくと、これはやっぱり日本人のDNAなんです。日本人のDNAが、昔からずっとその中で、そのDNAを引き継ぎながら、結局日本人としての精神文化を背景で作っていると思うんです。この精神文化こそが、やっぱり世界に誇れる日本人の、ある種のアピールすべきことであって。

それが形になったとき、今日の文化財の二つありまして、一つは建物としての文化財、例えば彦根城もそうですし、文化財としての建物とかそういうものがありますね。もう一つは、行事ということで、今日の話は行事が祭りになっていると。行事の運営というのは、やっぱりその地域、地域では、長浜であれば曳山祭り、やっぱあれも男の子しか上がれないです。山を引っ張っていく若い人も少ないので、それこそ大学生をアルバイトに入れたり、ときには自衛隊の方をお願いしたりしてやっています。行事というものは、一つはやはり人材育成事業なんです。子どもの頃から、若い衆に背中におんぶしてもらってですね、役者に出るということが誇りで、それを子どもの頃に

やってくると、東京行こうがどこ行こうが、祭りには帰ってくるんですよ。これは、ある意味の、DNAとしての人材育成事業が細々と生きています。それが結果的に日本人のおもてなしに出てきたり、日本人の精神文化を後ろで形成したりしていると思いますので、これはものすごくアピールした方がいいと思いますね。もしそういうものが寂れていくと、昔は日本でこういう文化があったみたいで、みたいに終わってしまって。結果的に、日本という国の形が変わってしまうような精神内容になってしまうことが、世界のためになるのかどうかとか、日本の未来にプラスとなるのかどうかと考えていくと、多分マイナスになりますね。そういう意味でもやっぱり、建物と行事を文化財の保存・活用の中で分けていきながら、例えば十一面観音はものすごくいい観音さんなんです。でもあれは祭りとしてどうやっているかという何もなく、鎮座しているだけなんです。でもあの十一面観音が、じっと見ているところから、内面から訴えてくるものが、その当時の人の精神DNAを今私が感じるとすると、それが多分日本が持っているすごさですよ。それをやっぱりいかに継承しているかということは、大事ですよ。あと保存しようと思ったら、経済的な裏打ちがないと難しいので、それはやっぱり先ほどの松井さんのように、観光あるいはそういう文化をよく理解してもらい。それが世界の平和にも必ずつながってくると思います。そういうことに滋賀県が、日本の大いなる発信としてできればいいなと。ただポータルとしての役割で、今土井委員もおっしゃったように、人をどこから引っ張ってくるのかと難しいと思うんですけど。でも、これも半分ボランティアで大変だと思いますけれども、誰か本当にすごい意識がないとできないと思いますね。黒壁の立ち上げのときもそうでした。よくこんなことをやるなと思う人間がやらないとできない。黒川温泉もそうですよ。全て日本のシャッター通りを開けるということ、文化を口開いて呼ぶということは、相当エネルギーがいることだと思います。でも頑張りましょう。

福永教育長

ありがとうございます。由布副知事どうぞ。

由布副知事

寺嶋さん、松井さん、ありがとうございます。お二人のお話をお伺いして、また委員の皆様方のお話をお伺いして、やはり文化財というのは、その地域、地元への愛を育むコアになるのではないかなということを感じました。お二人のお話をお伺いして、地域の愛、情熱をひしひしと感じたところであります。そういった文化財・文化というのは、地域を愛する核となるものだと思うんですけども、そういった今後の人口減少の中で、これまでにいらっしゃる方の地域への愛ももちろんなんですけども、いか

にそうではない方、例えば何らかの機会に訪れて来てくださった方、あるいは来ていただけるようにいろいろと仕掛けていただいていると思うんですけど、そういった方々に、その地域を愛していただく。あるいは転勤だったりとかいろんな事情で、その地域に増えてくださった方に、今後いかにその地域に携わっていただくか、そういうことではなかなか難しいというお話もありましたけども、いかにその地域に生まれ育った方ではない方に携わっていただくかっていうのが、今後いろんなものを持続可能にしていくためには、必要なのかなということ、大変難しい課題かなと思いますけれども感じたところでございます。

福永教育長

今ですね、様々な御意見出ましたけれど、今の何かこういろいろ出てき意見、あるいは意見交換した中で、これはということがございましたらお話をお願いします。特に私が今感じているのは、それぞれの、例えば、お祭りでしたら、もともとそのお祭りというのは、何かのためにやろう、藤田委員もおっしゃっていただいたように、私の地元にもあるんですけども、やっぱり地域が幸せに安全に暮らしていけるために、こういう行事をやって、神社とかに行ってそれをお祭りすることによって、地域が安全になるんだよねっていうその本質が全ての祭りにはあるように思っています。ですからその何て言うんですかね、その心をですね、やっぱりうまく引き継いでいく。そのためには、やはり形が引き継がれないとなかなか心が引き継がれないということで、形と心をどういうふうに引き継いでいけばいいのかということかと思えます。私も田舎の方に住んでおまして、いくつも祭りがありまして、先ほど男の子と女の子のお話がありましたが、私のところの祭りも以前は男の子だけでしたけども、非常に子どもが少なくなってしまったので、ただ、祭りの本来持っている意味を残すためにはですね、やっぱり女の子も参加してもらおうと、今半分以上が女の子になっているかもしれません。でも、小学生ですけども、女の子もそれに参加することによって、自分たちの地域の一員なんだなっていう意識が高まっていったと思います。それはちょっと神社の関係者の方の御理解がないと難しいのはよく御存知だとは思いますが。そういうことで、何のためにこれを続けているのかなっていう思いと、続けるためにはどうしたらいいのかっていうことだと思えます。そのためにはやはり、今やっぱりいろいろ出ていました関係者というか、関係人口をどうやって増やしていったらいいのかなっていうことだと思えますので、もしそういう、特にその人というのをどうしていけばいいのかっていうところで、皆さんから追加でお話とかあったら、ぜひとも聞かせいただければ。逆に言うと、寺嶋さんのところも男の子だけだよとか、あるいは曳山祭りも男の

子だけだよねということのハードルは、どこにあって、乗り越えられないものなのか、それぞれの祭りに意味があるので、違うとは思いますが。

藤田委員 難しいことですね。少しずつ、例えば、笛とか、太鼓とか、しゃぎりとか、ああいうのは女性も小学校のときに勉強しますし、しゃぎりとか祭りに参加するのは女性も子どもですから、参加できるように徐々になっていると思いますけども、山に上がるのは、多分、まだ難しいかも分からない。でもそれは、昔の人はそういうふう考えたんですね。今はどっちでもいいんかと思うんですけど、昔の人はそういうこだわりがあって、男尊女卑みたいなのところがあったのかも分かりませんね。

寺嶋氏 男女の話をさせていただくと、女の子を対象に、一つの字では、今は小さい神輿をつくって、子ども神輿で、祭りとは一切関係なく、当日にわっしょいわっしょいとやっていますね。だから、そういう参画意識っていうのがあります。曳山はちょっと格式の話だと思うのですが、我々の祭りは薙刀を使っているというのと、今日の映像で見えてなかったんですけど、竹の太さが握り拳ぐらいで長さが腰の高さぐらいで、先が割ってあります。鷲の近くへ行くと、あれでどつかれるのですよ。過去に指が取れたとか、飛んだとか、肩の骨が折れたとかですね、いろいろ危険が伴っているんですね。私は女性に参加してもらってもいいと思うのですが、逆に参加してもらって、もしそういう事故が起きたときに、どうなのかっていう話なんですね。そこが、私の悩みどころです。参加は構わないのですが、もしもっていう部分で逆に、そんな危ないんだったらやめろとかっていう本質的な話になるとちょっと困るなというのが悩みどころでございます。

福永教育長 ありがとうございます。それぞれいろんな事情もありますので、画一的にできるわけではないということでございますね。

あとせっかくの機会ですし、もう少し時間があるんですけども、このお祭りを、やっぱりその地域を元気にする、あるいは祭りに参加する関係者ではないんだけど、いろんな人に来てもらって、日本の心とかと、地域が持っている良さというところを理解してもらうためにですね、どんな発信とか、PRとかですね、そういったものにつなげていけばいいかとかいうふうな御意見がありましたお願いします。

松井氏 ちょっと話が戻ってしまうんですが、どう文化財を活用するかという話で、今回の大綱も、観光という話があって。でも、すごく私自身、何かこう活用

のために観光に来てということにすごく違和感があるというか。さっきもおっしゃっていましたが、観光というものを使ってというのはやっぱり理解できないとおっしゃったように、私も本当にそんな感じで、言ってみれば観光のためにというより、観光というものはあくまでも手段であって、来てもらうというのは目的じゃないんで、来てこっちで観光事業でお金を回してというのが事業じゃなくて。何が言いたいかというと、やっぱり本当にこういう文化に触れたくて来られる外国人の方は本当に勉強されてる方が多いんで、付け焼き刃のいかにもよくありますけど、何かこう刀を振り回したりとか、何かそういうのがちょっと日本文化って勘違いされている、分かりやすいのでは忍者とかもそうですけど。そういうのじゃなくて、滋賀県の持つものはずっと本当に深いと思っていて。だからそれを見透かされる、あんまり何かこう観光っていうので来てほしいというのはちょっと本来違っていて、さっきもおっしゃっていた日本人の精神性であるというのがあってこそその話なので、教育にもなるんですけど、それはやっぱり小さい頃から、そういうお祭りとか、いろんなものに関わってきて、それを受け継いできて、付け焼き刃じゃないという、その地域の生き様とか在り方っていうのを見て初めて、旅をされる方は感動されるんじゃないかなというふうに思っているんで、大綱についても書き方を観光に活用するというのは、私自身もちょっと違和感があるというふうに思います。

福永教育長

ありがとうございました。私もいろんな仕事をしてきましたが、今おっしゃっていた「本物」っていうのは、やっぱりすごく光るもので、すごく興味を引きつけられ関心と呼ぶものなので、その本物をいかに多くの人に知ってもらわなければならないところが、非常に大切なのかなと思っております。私は甲賀市に住んでいるんですが、甲賀の忍者も手裏剣投げているのが忍者というわけではなくて、もともと忍者というのがどういう歴史を持って、どんな活動をしていて、どんな工夫をしてきたのかっていうそういう歴史とか、文化とかですね、何かそういうものを知っていただくことが非常に大切ではないかなと思っております。そういう意味において、本物っていうものをいかに見せていくのか、知っていただくのかですね。本物に触れたい人たちに来ていただくのかなと。

土井委員

観光に限った話ではないんですけども、滋賀であれば、例えば、比叡山の延暦寺や安土城があったわけですが、これらは最初から伝統文化財だったわけではないんですよ。比叡山延暦寺は、平安時代に、最澄が最先端の唐の仏教を日本に持ち帰って、我が国で最先端の地になったと思うのです。安

土城もそうだったはずですが。その強いパワーで大きな存在となり、それが引き継がれて、伝統になったわけです。確かにもう侘びさびの美しさにはなっていますけれども、京都のお寺にしたって奈良のお寺にしたって、できたときは、朱色の柱に青丹の瓦など華やかなものだったと思うんです。

私は大学に勤めていますので、特にそう思うのですが、伝統を継承し、伝統を生かそうと思うと、常にそこに最先端のものがないと息づかないんです。大学には学問の伝統がありますが、それは古いことをやっていけばよいということでは必ずしもなく、古いものを引き継ぎながら何か新しいものを取り入れていかないと続かない、伝統が息づかないのではないかと思います。

これに対して、古い型を保存することも大事なことで、先ほども申し上げましたが、祭りを息づく形で維持することと、かつての伝統を守ることをどう両立するのかという問題は、ものすごく難しい話だと思うんです。そのあたりは文化財が常に抱えている問題で、文化である以上は、やはり今の人とつながりがあって、今の人たちがそれを生かせるものでなければ、文化とは言えない面がある。しかし、その引き継がれてきた過去からの大切なものも、当然守っていかなければなりません。そのあたりを、滋賀らしくどう結びつけていくのか、これがとても難しい話だと思います。かつてであれば、開発からいかに伝統と文化を守るかという問題であったわけですが、もう既にそんな時代ではなくなっています。コミュニティーの規模が小さくなっていく中で、どういう形で文化を維持・発展させていくのか、新しい発想で考え、新しい仕組みを構築していく必要があるのではないかという気がします。

福永教育長

ありがとうございました。大分時間も経ってまいりましたけれども、様々な御意見を頂きました。知事、最後に一言お願いします。

三日月知事

ありがとうございました。いろいろと御示唆を頂きました。

滋賀県では、例えば、伝教大師最澄が中国から仏教を持ち帰って比叡山を開いた。織田信長がキリシタンを認めて安土城を開いた。こうした動きは、当時は最先端だったし、恐らく国境を超えていたと思うんですよね。旧来の思想からはとんでもないことだったのかもしれませんが、それが今伝統になったり、文化財になったりしているという意味をどう考えたらいいのか。また、長浜の曳山祭りも、外国公演をされて、その良さが改めて分かったとか。富田人形も、外国人に教えてその意味が再認識できたとか。日野町の町並み保存は今、米国人も参画してやっているとか。ヴォーリズは、近江八幡に来られましたけれども、米原で鉄道YMCAを作られたとか。フェノロサ

は、滋賀県の文化財をたくさん大事にしてくださったとか。恐らくですね、そういった外とのつながりとか、外の人と一緒に作るとか、1回外に出てもう1回戻ってくるとか、そういうことの中で滋賀県の文化や文化財って、見出されたり、作られたり、守られたりしてきたんじゃないかなと思っていることが一つ。

もう一つは滋賀県の祭りって、子どもが主役の、子どもが関わる祭りが多いんですよ。例えば米原の鍋冠まつりも、ふらふらになりながら子どもが歩いているんですが、体験した子どもたちはずっと覚えている、DNAを埋め込まれているっていう、そういう意味もあるのかなと。

あと、活用というどうしてもイコール観光のように思われるんですけど、僕たちは、やっぱり本当の意味での観光、損なわない範囲での活用を考えていきたい。だから本当の意味での観光とは、光を観るということですから、文化財の意味とか歴史とか、関わっている人の思いとか、こだわりとか、そういうものを大事にした活用を志向していかないと、滋賀の良さをやっぱり損するだろうなと。ここは大事に、今回の大綱でも作っていかないといけないだろうなというふうに思います。

本日、たくさんの御示唆をいただいて、改めて皆さんのお手元にお配りしている滋賀県文化財保存活用大綱（素案）を御覧いただきたい。真ん中にある「文化財〈宝・誇り〉」を今、地域住民の皆様が一生懸命守っていただいているのですが、実は来てくれる人とか知らない人とか、見てみたら案外おもしろいっていう人との関わりの中で、どう守っていくのかという視点が意外に大事で、ぜひこうした良い意味での好循環を作りながら、文化財もちゃんと保存・継承され、地域も元気になるような取組をぜひ作っていききたいと思います。改めて今日学ばせていただいたので、大切に作っていききたいなと思います。今日は本当にありがとうございました。

福永教育長

本日は、様々な御意見を頂きました。人、日本の持っている精神や心、あるいは外の人、関係者をいかに増やしていくのか、その中で地域をしっかり守っていくことが、その地域の文化財を守っていくことにも当然つながりますので、その地域と文化財の関係、様々な点について御意見を頂きました。また今後、今検討中の大綱にもですね、しっかりとそうした思いというか、目指すべきものを入れながら作っていき、そして滋賀の文化財、滋賀の心というか滋賀の良さをですね、次世代に、そして未来につなげていく、そしてそれが滋賀というものの、ますます地域が元気になっていくことにつながると思っております。

それでは時間も迫ってまいりましたので、本日は以上で終わらせていただ

きます。今後、教育委員会だけではなく、知事部局を含め、様々な部局が総力を挙げて、全体として総合的にいろんな取組を進めていくことで、滋賀の文化財を保存・活用・継承していく取組を進めたいと思いますので、皆さん引き続きよろしくをお願いします。本日はありがとうございました。